Argonauta 21:39-40 (2012)

大垣を追悼する

竹之内孝一

博物館の石田さんから思いもかけないメールを受け取った。大垣が亡くなったというのだ。大垣とは３０年来の友であり、同じ道を歩いた同志として、強い絆を感じていたから、その報はまるで片身を切り裂かれたかのような衝撃であった。

３０年来の友というのは少しちがう。近年、意見の相違からほとんど口をきかない仲になってしまっていたからだ。しかし、彼とは共に京都大学で学び、白浜の瀬戸臨海実験所で大学院生活をおくり、その後も磯の貝の生態や海岸の変遷に興味を持って過ごしていたから、すごく近いといえば近い関係であった。

大垣は大学では１年下である。私が入っていた京都大学貝類同好会に遅れて入会してきた。学生の暇な時間を最大限生かし、南の島や南紀のエビ網に貝を採りに行くといういたってお気楽なサークルであったが、私はそれにどっぷりとはまっていた。土曜日とかよく集まって貝類談義をしたものだったが、そのメンバーの中に囲碁のうまい TG 君がいて、私も大垣もその手ほどきを受けた。有り余る時間のなかで、囲碁を覚えようとしたのだ。下宿でゆるゆると時間を過ごしていた時代の話である。TG 君が先生となって、私も大垣も何局か打ってもらったのだが、そのときに彼の言った言葉を今も忘れない。「竹之内さんも大垣さんも力量は同じぐらいなんだけど、じっくり考えて手を打ってくるのは大垣さんだね」と。当時からの性向はその後ちっとも変わらなかったといえる。

大学院時代、私があちこちに手を出し、方向も決まらずに悪戦苦闘をしているのを尻目に、大垣はタマキビ類の研究を堅実にまとめていった。とはいえ、どちらも同じく長い大学院時代を過ごした。その後大垣は高校教員を少し務め、石垣島へ移り住んだりしたが、その後田辺市に居をかまえて、動くことはなかった。

大垣とは、田辺に居を移した後、いっしょにフィリピン旅行をしたことがある。フィリピン旅行といっても、セブ島とかダイビングリゾートに行ったという話ではない。当時、磯の貝の生物地理に興味を持っていた私は、フィリピンと台湾の間の Batan 島に行く計画を建てて、大垣を誘った。結果としてはあまりうまくいっていなかった彼との関係が決定的に悪くなるという方向に進んだのは残念であった。

遠い昔のこととてほとんど忘れてしまったが、いくつか断片的に覚えていることは、旅

の途中でも、彼は彼であったということである。彼が生きていればそんなことはないと否定するだろうが、大垣はストイックすぎるのである。絶対にタクシーに乗ろうとしない。昨日の晩のパンを朝用に残していて、「これですますから、朝ご飯には行かない」と急に言う。Batan 島でサービスで提供された椰子の実ジュースを受け取らない。Batan 島に着いたとき、空港で近づいて来た宿斡旋のおばさんの言うことが実情と違うと怒る。私などはなあなあですますところをすまさない。

Batan 島の旅は飛行機は舗装していないでこぼこの滑走路に着陸するやら、夜の 12 時から昼の 12 時までは電気が止まるやら、まるで文明が半分だけやってきたような島であった。島の大部分が放牧にあてられ、山がはげはげになっていた印象がある。

この旅行は最後の最後にマニラ空港であずけた荷物から金目のものが盗まれるというおちがついてさんざんなものになってしまった。大垣も同様に盗まれていて、アパートに戻ったときに、鍵がなくなっていて大家さんに部屋を開けてもらったという話を後で聞いた。そのときに採集したシャカトウダタミやカザリクロヅケはまだ手元にあるから当初の目的は果たしたのだけれど。

もうすでに年賀状のやりとりさえなくなっていた大垣から番所崎調査の論文が学校の方に郵送されてきたのは、今年になってからであった。そのお礼をかねて「写真でわかる磯の生き物図鑑」を贈ったところ「欲しかったけどまだ購入していなかったのでうれしい」と礼状がきた。冷戦状態だった我々の関係を解きほぐすきっかけになるかとちょっとよろこんだのだったが、それがとても甘い見通しだったことは石田氏からのメールで明らかになったのだった。

大垣と私が関わったイベントとして番所崎調査があるが、これについては別に出す予定のいそこじき大垣追悼号にまわしたい。

（たけのうち　こういち・奈良学園中学校高等学校）